

バイアーノの修道院

ナポリ古文書館から発掘
JC.....o氏によるイタリア語からの逐語訳
「16世紀年代記」

以上に先立つ愛書家 P.-L. ジャコブ氏による
「16世紀修道院探究」

クロプシュトックの熾天使のように美しく、
ミルトンの悪魔のように恐ろしい。
デイドロ

パリ
H . フルニエ・ジュヌ書店
セーヌ通り 14 番地
1 8 2 9

バイアーノの修道院 目次

まえがき	5
16 世紀修道院探究	9
歴史散歩 ^レ ^シ	65
年代記	91
主要人名	162
注釈	166

* * *

解説—知られざるスタンダールの匿名本—	184
参考文献	210
あとがき	223
訳者紹介	226

* * *

凡例：原文の固有名詞はフランス語とイタリア語が混在している．
訳文では邦語で一般化している場合を除き，各々の発音を
そのままカナ表記する．原文の斜字体、（）の注釈はそのまま
訳文に反映し、原文の脚注は訳文の改行後に適宜挟む．訳文の
改行箇所は原文に従う．その改行箇所に適宜行間を空ける．
〔〕の注解，本書の脚注は訳者山本による．

まえがき

この年代記が事実そのままであることは、先ず、汲みとったので諸々の源を知っているわたしたちには疑えず、読者も過ぎさった諸世紀に関する記念碑的業績に少々注意して調査すれば誰でもそのように思うことだろう。わたしたちがイタリア人著者の単純なスタイルをそのまま生かしたのもまた、わたしたちのこの上ない誠意の担保である。この文書を原本から遠い魔法の文体で包むことは難しくなかったであろうが、わたしたちはなんら整えようとも乱そうともしなかった。わたしたちは原本のひどく痛ましい真実とともにバイアーノの聖アルカンジェロ修道院で起きた悲しみと恐怖の全場面を再現した。おそらくナポリ政府はこれを埋もれたままにしておきたかったであろうが、この文献がたまたま忘却から取り出された今、そのいきさつは以下のように説明できる。

1610年のこと、バイアーノの修道院廃止に先立つ数々の事件で重要な役割を果たした幾人もの修道女らの親族で、生まれによっても財産によっても勢力のあった騎士フランシスコ・パオロ・カラッチョーロは、本物の書類を手もとに置いてこの年代記を書き上げた。フランシスコ・パオロの家族は、人々がこの年代記にある名が大方はナポリで大いに尊敬されている名と分かれば眉をひそめるだろうと思い、細心の注意をはらって不幸な時代の年代記を保管した。この手稿は前世紀末、^{ラザローニ}下層民やリュッフォ枢機卿の指揮下に集まった一味がナポリを略奪した時、金にものを言わせる外国人らの手にわ

たった。続いて政府がそれを買取り古文書館に置いた。だからわたしたちはそこでその手稿が読めた。わたしたちは、当時知られていなかったその原本を最初に写しとった人の名を明かせない。そんなことをすれば、今は亡きその立派な人物の遺族を危ない目にあわせてしまうからである。

わたしたちはこの年代記を読んで奇妙な興味をかき立てられ、これら異常な出来事と関係のある時代を知ろうと別の調査をしなければならなくなった。わたしたちは何人もの親切なエリートのナポリ人に助けられてあれこれさがした後、ナポリにある大司教庁古文書館、カプワン城、造幣局古文書館にある書類を入手できた。別の情報はナポリで公証人をしている父親の後をついだ弁護士が、バイアーノの修道女家族に関する巨大な山積書類から提供してくれた。聖アルカンジェロ修道院についての訴訟調書原本書類はローマにある『忠実広報』修道会の戸棚に保管されていたが、わたしたちの出版する物語とまったく一致している。

わたしたちが両シチリアで最も有名な家系の人々にそえた注釈は、『ナポリおよびアラゴン王国ナポリ人飛地で起きた恋愛事件と悲劇』と題された写本からぬき取った。その写本の文体とそこに支配的な思想を読めば、16世紀末ナポリに駐在した教皇特使がぬすんで注をつけたことが分かる。

わたしたちは『ナポリ貴族最高峰』と題する別の文書も利用できたであろうが、そこにある破廉恥な言動は本当であろうと嘘であろうと引用する値打ちはないと思われた。

1820年、わたしたちがこの年代記の解説に必要な資料をそえて原語で年代記を発表しようと考えていた矢先、カラブリアの医師 G ... M が『バイアーノの修道院』の要約を数ページの小冊子で

出版した。思いがけない不都合だったが、わたしたちの意思は、特にこの冊子を読んで後はみじんもゆるがなかった。ナポリ人にとって最大の見どころは、歴史的な名前の暴露にあったはずだからである。それらの名は数々の出来事と同じように両シチリアの歴史がからんでいるので、暴露していたらこの出版物は必ずスキャンダルでヒットしていたであろう。だが、この冊子は気取った不正確で訳の分らない文体で書かれ、みだらな思想や考察で汚れている。要するにまるごと純粋に保管された手稿の魅力は何もなかったにもかかわらず、1820年オーストリア軍が侵入すると消えた。冊子の著者はナポリ立憲体制下で出版が自由になった9ヶ月間自著の認可は守られると思いこんでいた。だが、今度は警察が公共道徳に復讐しその作品を取りおさえたので、救われた版などほとんどない。

わたしたちの出版物に似たものがすでに出了以上こうした説明は欠かせないと思う。しかしくり返すが、出来事、名前、文体は予め変えて削ってあるので、『バイアーノの修道院年代記』はまだ読者の批判にさらされていない著作として通る。

この翻訳はまたしてもイタリアニズムに満ちているが、原本を裏切りはしまい。それに、わたしたちは近々原本を出版するが、これはナポリに爆発的な流行を巻き起こすにちがいない。古い貴族の一門で、バイアーノの修道院が語る恐怖の只中に自らの家名をみつけない者はない。わたしたちはひどくイタリア的な細部のあちこちに、フランス語の貞節な〔意味内容を変えない〕表現に助けられて透明なベールをまといせられた。

おしまいに、修道院内部の生活はどの国も同様だったので、『ウォルター・スコットの夕べ』編者、P.-L. ジャコブ氏に問い合わせたところ、氏はわたしたちのために「16世紀修道院探究」の執

筆をこころよく引き受けてくださった。ここはジャコブ氏をほめる場ではないが、氏は単に尊敬すべき骨董屋であるばかりではなく、氏自身が適当と判断する時に氏自身の面目を充分発揮するのにまかせる。しかし中世に関する探究にかけては、誰も氏以上にうまく執筆できる状態にはなかった。わたしたちが氏を選んだのはその学識に敬意を抱くからこそであり、読者が同意してくれることを願っている。

16世紀修道院探究

1¹⁾

修道院にとって16世紀はフランス、ヨーロッパ、その他いたる所でよき時代であった。修道士戒律はこの好運な時代以前の方がたぶん支配力は強かったであろうが、これ程多様で、これ程多数で、これ程豊かで、これ程退廃した時代はなかった。だから、死骸からうじ虫がわくように墮落から改革が生まれた。修道士という、暇と布施と祈りで暮らす利己主義者は、どんな宗教、どんな時代、どんな所にもいる。しかしこんな風に寄生的に根をはる植物はえてして、旧教の方にはずっと癒着ゆちゃくしているように思われる。旧教の方が多くの沃土や肥料、とりわけ多くの耕作者を抱えているからだ。

ローマではせいぜい100人の巫女みこしかいなかったが、同時代の事情通によれば、尼は1580年リヨンの大司教区だけで2,355人以上はいた！

修道院がはびこるにつれて美しいフランス王国は貧しくなっていたが、そもそも国の人口を減らす性質ではなかった。それどころか、修道士も修道女もこの点を改善していたのである。それで『イギリスに降りた九星座』の著者はもっぱらドミニコ会²⁾やカルメル会修道士たちを雨霰あられと降らせることばかりを考えていた。聖ジュレは彼の風刺詩で、フロックやガンブ頭巾をかぶった修道士が驚異的に増殖したわけを気取らずに説明している。修道士は一石二鳥をや

1) 以下の翻訳部に適宜章分けをする。

2) 原文は《jacopins》。

るのだ。

ここでは修道士たちがよき方針の下にやったことが善か悪かを証明するのではない。どちらの問いも机上の空論であろう。それぞれの修道会規律の歴史をその変革、立役者、宗教会議、戒律をふくめて語ることはベネディクト会修道士向きの仕事である。近ごろ二折判はまれで、フランシスコ会士やカルメル会士たちの豪華さを後世に伝えるのに、ついに 20 冊も書かれなくなった。男女の修道士らについては数ページに載っているだけだが、彼らの傾向、人数、富は伝える値打ちがあるので、わたしとしては逃げないように用心していた修道士や尼たちを集めざるをえない。しかし事実はこの世で最高に立派な説よりもはっきりと語る。それらの事実が碑文アカデミーに直接書き込まれていたらよかったのだが！わたしは最も誠実な事実から選んだが、だからと言ってすべて誠実というわけではない。これは主題の欠点である。修道院に関しては、アウゲイアス〔太陽神ヘリオスの子〕の牛小屋を掃除する必要はないのだ。

修道士らのゆかいな生活については、物語作家や小説家の証言と同じく、父親が子らにくり返し聞かせ、^{ことわざ}諺に刻印までされた一種のもの覚えによって知られている。修道院と聞いただけで、一群のいまわしい観念がめざめ、知らず知らず嫌悪感や軽蔑の爆笑がこみあげる。^{クヴァン}修道院はかつて集会（^{アサンブレ}コンヴェントゥス）というほどの意味しかないコンヴァンと言われた。

古い表現でいうねじれる首〔^{トルコル}アリスイ〕の悪徳が昔から小話、警句、風刺詩、年鑑を書くのに役立っていた。ラブラーやマルグリット・ド・ナヴァールより前に、教会の聖職者たちは韻文、散文、ラテン語、フランス語でからかわれていた。13 世紀にギヨ・ド・プロヴ